

〔会員新刊紹介〕

角鹿尚計著

『日本古代氏族の祭祀と文献』岩田書院

(令和三年(二〇二二)八月刊)

松村知也

本書は福井市立郷土歴史博物館に学芸員として長年勤務し、令和二年三月に退職された著者の約四十年にわたる古代史研究の集大成といえる一冊。

著者は福井市立郷土歴史博物館学芸員として、越前を中心に古代から中・近世、幕末に至るまで、幅広い時代と歴史的人物を研究対象として数多の業績を残しているが、本来の研究分野は古代史、とりわけ傾注されていた研究対象が、越前における地方氏族の動向である。文献史学のみならず、国語学、考古学はじめ歴史学以外の視点や知見も加味し、掘り処となる良好な史料が限られる古代氏族、特に地方氏族の動向を、立体的に浮かび上がらせようというのが本書の目的である。主要な構成は次のとおり。

第一編 越前国在地氏族の動向と祭祀

第一章 足羽神社と阿須波神

第二章 生江氏の氏神

第三章 生江臣東人と阿須波臣東麻呂

―奈良時代における越前国足羽郡在地氏族の盛衰と祭祀―

付論 越前における東大寺領荘園の人々と文字

第四章 継体天皇を祭神とする神社について

第五章 氣比神宮と神功皇后

第六章 越前国府考―疑れたる「武生の国府」―

付論 越前国府比定地「武生」という佳字について

第二編 韓神と常世神

第一章 園韓神祭の成立

第二章 常世神考

第三章 泰澄大師の出自と『懷風藻』

第三編 古代氏族研究資料としての『懷風藻』

第一章 『懷風藻』の撰者について―安宿王説の提唱―

第二章 『懷風藻』の成立とその背景に関する一試論

第三章 平安時代における『懷風藻』流伝考

第一編は直接越前地域を対象とした研究成果をまとめている。第一章から三章にかけては、古代越前における有力な氏族であった足羽氏と生江氏について、東大寺領荘園関係史料のほか、各氏族の祭神についての考察や地域の古墳群の考古学的成果を材料に、その動向の差異を浮かび上がらせている。また後段の第二編とも関連するが、両氏の祭神がいずれも「帰化蕃神」の系譜に属するものと分析、これが形は異なるものの、やはりいずれも在地の継体天皇伝承の中

に位置づけられていくとしている点は、地域の信仰の「層序」の重なりを実感させられるもので、興味深い。

第四章では継体天皇とこれを祭神とする神社、第五章では神功皇后と気比神宮という、いずれも記紀の著名人物と延喜式内社、また気比神宮の関係を、前者は近世を中心とした後世の文献を、後者は記紀の記述を丁寧に分析することで明らかにする。

第六章「越前国府考」、付論「越前国府比定地「武生」という佳字について」は平成十一年に水野和雄氏が発表した「越前敦賀の復権 越前国府・愛発関・敦賀津・郡衙・松原客館等の官衙」(『敦賀市立博物館 紀要』第十四号)に対する著者の批判と再反論をもとにしている。水野氏が敦賀市近郊での条理遺構の発見という考古学的成果を中心に論を展開しているのに対し、文献の読み込み、国語・国文学、神道史学の広汎な知見をもとに丁寧に反論を重ねられている。こと越前国府の比定についてのみならず、紫式部も目にしたであろう越前の古代について興味を抱いている方には、具体的なイメージをつかむことができる論文としてお勧めしたい。

第二編は渡来系の神々である「園韓神」「常世神」などの「韓神」についての考察、さらに韓神の奉祀がさかんであり、神仏習合もいちはやく行われていた古代越前の地域的個性を背景に生まれた白山信仰の祖・泰澄について論じている。第一章「園韓神祭の成立」は古くより宮中で奉祀される園韓神のルーツは渡来系氏族である秦氏の奉祀する大歳神の系譜に連なることを論じている。同じ大歳神系譜に連なる神には足羽神社の古くからの祭神と目される阿須波神も

含まれており、阿須波神を奉祀した地方氏族・足羽氏との関連性が浮かび上がる。第二章「常世神考」は日本史上初の道教的「淫祀」(国家権力ないし支配者によって、反体制的な傾向を持つとみなされた民間信仰)の記録である日本書紀の常世神事件をとりあげ、原神道(わが国固有の信仰)と外来信仰の複合現象として分析する。特に蚕に似た虫であったとされる「常世神」を、柑橘類につくアゲハチョウ属のナミアゲハに比定する説は、神道史学に加え昆虫学・鱗翅学にも造詣の深い著者の面目躍如といえる説得力がある。

第三章「泰澄大師の出自と『泰澄和尚伝記』」は、韓神信仰や神仏習をはじめとする、古代越前が持っていた特異な文化・信仰相が白山信仰の祖・泰澄大師という個性を生み出したとし、大師が河川交通に関係した在地の帰化系氏族の出身とする先学の指摘を踏まえたうえで、「三神」という特異な姓に注目し、これを「泰澄和尚伝記」作者の泰澄大師の出自を明確にするための創意とみている。第三章以外は直接越前に関する論考ではないが、「帰化系氏族」「韓神信仰」などをキーワードに、古代越前がもっていた特異な文化的背景を基盤とする白山信仰・泰澄大師信仰の興隆をよく理解できる構成となっている。

第三編は、著者もつとも古くから研究対象として取り組んでいる、現存最古の漢詩集『懷風藻』について、これに付された小伝その他の記述から、その撰者や成立背景、後世に与えた影響を論ずる。広く知られた漢詩集でありながら、成立についての謎も多い『懷風藻』だが、特に第二章における撰者の推定など、背景にあったとみ

られる当時やその前後の政治情勢など、記述の端々から説き起こしていく流れは良質のミステリーに通じる妙味がある。

このように本書は著者の長年の研究成果を編んだものであり、各章として収録された論文も個々の繋がりは一見薄いように見えるが、その中に著者の古代氏族やその祭祀に対する一貫した鋭い眼差しを感じる事ができる。同じ福井・越前の郷土史を追究する者として、一つの模範としたい足跡が記された論集であり、郷土の古代史に興味をもつ福井の方々にもぜひ手に取っていただきたい一冊である。